

## ライシテの歴史 ④

天理教リヨン布教所長  
藤原 理人 Masato Fujiwara

1589年アンリ4世が王位につき、ブルボン王朝が始まった。そして17世紀に絶対王政の時代を迎えるのだが、その最盛期を現出したのが在位期間最長を誇る太陽王ルイ14世である。

その出生には逸話がある。父王ルイ13世と王妃アンヌ・ドートリッシュは長年嫡子ができず思い悩んでいたという。敬虔な信仰者であった王夫妻は、1638年2月10日、親書をもってフランス王国を聖母マリアに捧げた。つまり8月15日の聖母被昇天祭には、フランス中の教会が聖母のための行進を行うと定めたのである。そして同年9月5日、願いが叶ってサンジェルマン・アン・レーにて嫡子ルイが誕生する。23年という年月を経て生まれた世継ぎは「神の贈り物 (dieudonné)」と呼ばれた。5歳で王位に就き、72年というヨーロッパでもまれにみる長期政権を現出したルイ14世の誕生は、フランス王家の強固な信仰心を表す逸話とも言えるだろう。

ジャン・ジュヴネ (Jean Jouvenet) が絵画にしたように、神の代理人として聖別されたルイ14世もまた歴代の王と同じく不思議な力を持つとされた。その手を病人に当て「王が触れ、神が治癒する」と唱えれば、病氣 (リンパ性疾患) が治ると言われたのである。敬虔な王の統治下で再建、新築されたカテドラル (司教座聖堂) は14を数え、直々に干渉した1690年完成のオルレアン司教座聖堂には、王家の印が至るところに刻まれた。またパリ外国宣教会が誕生した1663年も彼の統治下であり、同会の海外進出に伴って、かつてのポルトガル王のように太陽王もまた宣教師たちの庇護者として振舞った。

このように王権神授説を具現化し絶対王政の権化として君臨したルイ14世は、新教弾圧に取り掛かる。1680年カトリックからプロテスタントへの改宗を禁止、1681年からは竜騎兵ドラゴナード (Dragonnade) による迫害を強めていった。そして1685年にはフォンテーヌブローの布告を發布、プロテスタントを容認したナントの勅令を廃止するに至った。しかしながら、この政策はカトリック教国からも賛同を得られず、マドリッドの教皇特使は新教国のカトリック信者が迫害されるのを恐れ、英国王にヴェルサイユへの仲介を依頼し、フランスのイエズス会にはナントの勅令復活のための働きかけを要請したという。結果としてこの政策は成功せず、宗教統一はなしえなかった。表向きだけの改宗が多かったり、ボシュエのように強制的な聖体拝領に批判的な旧教神父もいたり、期待した成果とは程遠い結末となった。ローマ教皇インノケンティウス11世ですら非難し、カトリック諸国からの理解も得られなかったことで、外交的失策とも言えた。経済面では1660年から1720年の間に20万を超えるプロテスタント信者が国外へ脱出し近隣諸国への技術流出を招いたが、必ずしもフォンテーヌブロー布告前後の弾圧のせいでフランス経済が破綻したとは言われていない。むしろ、フランス語の流布や各地に散った血縁を利用した商業活動の国際化に注目する向きもある。

結果はともかくプロテスタントに対しては一貫して厳しい態度で臨んだルイ14世だが、カトリック内にも悩みを抱えていた。その一つがポール・ロワイヤル修道院の主導する、悲観的な人間論と予定説に近い思想からローマに異端視されたジャ

ンセニズムである。特に教育の分野で優れた実績のあった同修道院は、ブレーズ・パスカルを初め理解者が多かったため、有効な封じ込め策を講じることができず、教皇の力を借りてなおジャンセニズムを駆逐することができなかった。1679年には新規入門者の受け入れを禁止、1709年から1711年にかけて修道女の追放と修道院の破壊に成功するが、長きに渡りポール・ロワイヤル修道院の影響力は衰えなかった。対立関係にあったイエズス会を1773年に解散に追い込んだ一因になったとも言われている。

一方、16世紀のカトリック宗教改革の最中に産声を上げたイエズス会は、大学教育、霊的指導、宣教活動、慈善事業の4つを活動の軸とした。1540年パウロ3世により教会から正式に認可を得たものの、パリのモンマルトルの丘で誕生した同会は、フランスで法的地位を得るまでに21年かかっている。会が目指す学校の設立は、既存の修道会に任せていけばよいことであるし、芸術や文学の教授も目に余る活動と受け取られた。彼らが国境をまたいで展開する活動も問題視された。とはいえ何よりも懸念されたのは、そのローマ教皇への忠誠であろう。ルイ14世も、彼らの従順さに不信感を抱いていたといい、王の司祭であったイエズス会士ポール・ラシェーズが上手く立ち回ったことで、その存在を認知してもらえたという。

以上のことを別の視点で捉えることもできる。アンリ4世に始まるブルボン家は、17世紀から18世紀にかけて絶対王政を確立、強大で安定した力を得た。ルイ13世下では宰相リシュリューが八面六臂の働きをし、ルイ14世幼少期にはマザランが貴族たちのフロンドの乱を鎮圧し王の信頼を得たが、彼らは枢機卿、つまりカトリック司教であり、王家とフランス教会は蜜月の関係にあったといえる。そして比類なき隆盛を見せる王国の華々しい威光を背景に、フランス教会もローマ教皇という宗教的権威から距離を置こうとする動きが活発化してくるのである。

教皇の介入もジャンセニズム終息の決定打にならなかったこと、そしてパリ外国宣教会とイエズス会が深く関与した中国典礼論争においても、教皇の中国式典礼禁止にも関わらず激しく議論が揺れ続けたことなどは、教皇の宗教権威たる力がフランス国内で弱まりつつあった証左と言えるのではないかと。

実際、1682年、フランス司教たちはボシュエの思想を基に、教皇は無謬ではなく教会会議の方に優位性を認め、世俗権に関しては王に干渉できないとする四カ条の宣言を採択した。これが近世フランスの独特な宗教史を形成し、後のライシテ史にもその影を落とすガリカニズムである。

[参考文献]

- (1) Corbin Alain, *Histoire du christianisme*, Seuil, Paris, 2007, 302～310頁
- (2) Heim Manfred, *Les dates-clés de l'Histoire de l'Eglise*, Salvator, Paris, 2007, 187～203頁, 297～319頁
- (3) Chaline Olivier, *Le règne de Louis XIV*, 350～369頁
- (4) フレデリック・ドリューシュ、『ヨーロッパの歴史』、東京書籍、1995、238～251頁